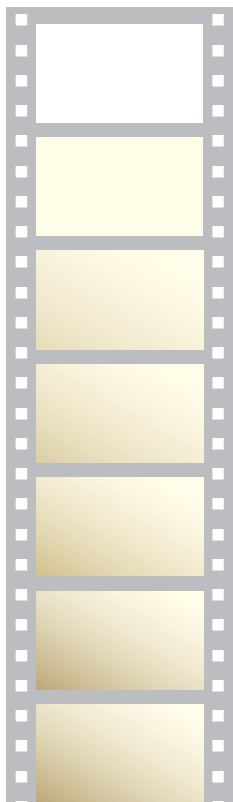
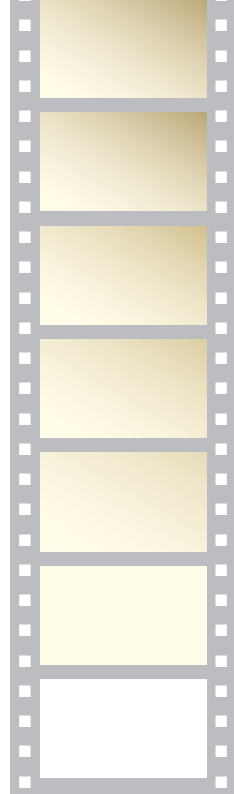


伸<sup>ノ</sup>さんのシネマトーク

鈴木 伸夫





## 第二十六回 「プレスリーとスパーク」②

二本立洋画封切映画、もう一本の作品は、カトリーヌ・スパーク主演の「恋のなぎさ」というとてもロマンチックな題名でした。

ぼくは、この作品は始めから二本立の添え物映画とばかり思っていただけに、観終わつたあと「青春の切ない思いが強烈に詰まった作品だった」と反省し、「映画は観なければわからない」という言葉を肝に銘じたのです。

物語は、ナポリ湾に浮かぶイスキア島を舞台に、夏のバカンスにやって来た高校を卒業したばかりの一人の女性（スパーク）と、彼女をめぐる二人のボーイフレンド（一人は、当時の青春映画のスターで現在、プロデューサーと俳優で活躍しているジャック・ペラン、もう一人は当時スパークと結婚していて、この映画撮影後離婚した俳優のファブリツィオ・カブッチ）、そして、もう一人の中年男との四角関係を描き、その恋の結末は、何と中年男が彼女を手に入れるという物語で、ショックを受けた彼女のボーイフレンドの一人が、がけから身を投げて亡くなり、恋多き主

人公の女性も、この事件を契機に自分の人生を見直すというストーリーです。

高校二年生のぼくにとってショッキングな物語でしたが、ストーリーはともかく、ぼくは、主演をした彼女に一目ぼれをしたのです。水着姿の彼女は、スラリと伸びた長い足、整った顔立ち、その時代の言葉で言えば「八頭身美人」で魅力的な女性でした。

その名は「カトリーヌ・スパーク」

彼女はパリジェンヌ（フランスのパリ生まれ）でありながら、15才でイタリア映画「十七才よさようなら」で映画デビューし、「狂ったバカンス」「太陽の下の18才」などの青春映画でスターになりました。父親は「外人部隊」「ミモザ館」など、30年代フランス映画の名作シナリオのライター、シャルル・スパーク。

テレビでシャルル・スパークの娘だと紹介された番組をソフィア・ローレン（イタリアの女優）が見て、夫の名プロデューサー、カルロ・ポンティに推薦したのが女優へのきっかけでした。

彼女の歌う映画の主題歌「恋のなぎさ」は、日本のヒットパレードにランキング

され、ぼくは、その曲が放送されるたびに胸をときめかせて聴いていました。（映画主題歌とは別に「若草の恋」というヒット曲もあります）

そんな彼女に「もう一度会いたい」と思っていたところ、東京で90年代後半、渋谷系の映画音楽がブームになりました。渋谷系とは、渋谷界隈を中心とした、都会的でスマート、ポップでおしゃれな音楽のことですが、とくに渋谷系のサウンドトラックは60年代〜70年代のイタリアB級映画音楽が愛好されました。そのなかに彼女の出演した「太陽の下の18才」「狂ったバカンス」二本の映画が入っていて、何と夜9時からレイトショーで上映されることになったのです。帰りの電車が心配でしたが、終電に間に合う時間で安心しました。初めて彼女にスクリーンで出会ってから、33年後に東京で再び会えるとは！東京支社勤務時代、最大の出来事でした。残念なことに「恋のなぎさ」の上映はなくDVDで発売されていないか、いつも調査を手伝ってくれるS君に調べてもらったところ、それから9年後、日本語字幕スーパージョー、イタリア語版の「恋のなぎさ」が見つかったのです。

ほとんど映像は覚えていませんでしたが、映像では、見えそうで見えない彼女の

オールヌードシーンもあつたのを思い出しました。

青い海、青い空、そして白い砂。映画「恋のなぎさ」ほか、スクリーンのなかのカトリーヌは、ぼくの心をスパークさせて、青春時代と中年時代を駆け抜けていったのです。

パリジェンヌでありながらイタリア映画で人気者となり、アメリカ映画などにも出演しましたが、結局はイタリアへ戻り、97年にはイタリア国营放送土曜日のバラエティ番組でレギュラーのコメンテーターをしていました。現在は？ 映画「恋のなぎさ」では、昔の名前で出ています。(彼女の場合、昔も今も同じですが…) お元気なら今年(11年)66才になります。

(了)

文中敬称略

伸

平成23年8月